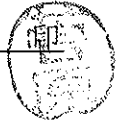


博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 菅原 睦



学位申請者 HALNAZAROV MAAMORJON（ハルナザロフ マムルジョン）

論文名 「親族語を中心としたウズベク語の呼称について—日本語との対照的観点から—

<審査結果>

菅原（主査）と本学の早津教授、川村教授、吉枝准教授、および外部審査委員の河原弥生氏（日本学術振興会特別研究員）の5名からなる審査委員会は、1月28日に行われた公開審査の結果、HALNAZAROV MAAMORJON氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると全員一致で判断した。

<論文の概要>

HALNAZAROV MAAMORJON氏の学位請求論文は、全7章からなる本篇187頁と、別冊の資料篇146頁とからなっている。本篇は第一部 序論、第二部 本論、第三部 結びに分けられている。以下、それらの概要を紹介する。

第一部 序論は、本論文の目的や研究対象（第1章）、ウズベク語の概説（第2章）にあてられている。

第二部 本論では、まず第3章において本論文で扱われる「人称」、「人称代名詞」、「親族語」、「愛称」の概念が簡単に定義される。続く第4章から第6章が著者の収集になるデータとその分析の提示にあてられており、本論文の主要な部分をなすと言ってよい。はじめに第4章では、呼称の分析を行うにあたってのいわば文法面での前提となる人称代名詞、なかでも2人称代名詞の用法について重点的に論じられている。著者はここで、ウズベク語の2人称代名詞 *sen* : *siz* が、形の上でこれと並行性を示す1人称代名詞単数 *men* : 複数 *biz* の場合と異なり、用法の面では単なる単数対複数の対立ではないという点に着目する。20点を超えるウズベク語文学作品中の会話部分から丹念に用例を収集・分析することにより、従来の一般的な記述とは異なり、*sen* と *siz* とはそれぞれ2人称単数の親称・敬称とみなされること、一方で *siz* に複数接尾辞 *-lar* が付された *sizlar* は待遇的に中立的な代名詞であること、などの興味深い指摘がなされている。親称と敬称との使い分けの傾向や、名詞（句）や述語における人称表示、すなわち人称代名詞との一致の現象についても論じられており、豊富なデータに裏付けられた説得力のある議論と評価することができる。第5章はウズベク語親族名称についての記述であり、母語話者に対して行ったアンケート

調査の結果に基づき、呼びかけの場合と言及の場合に用いられる呼称が扱われている。上位世代／同世代／下位世代の区別と個々の親族・姻族関係、呼びかけか言及か、さらに回答者の年代、といった複数の要因が交差するきわめて複雑な使い分けの実態が網羅的に提示・分析されている。さらに親族語の構成や、親族語に付される所有一人称接尾辞の用法、言及表現にみられる視点の移動などの問題もあわせて論じられており、本章はこの論文のもっとも注目される部分である。第6章ではウズベク語の愛称の形成法が分析されている。ウズベク人の人名リストを元に行ったアンケート調査により、可能な限り多くの愛称を収集し、省略や接辞付加による愛称形成のパターンを整理している。なお第4章から第6章までの各章には、それぞれ日本語での該当する現象についての先行研究や、日本語との対照という観点からの分析も含まれている。

第三部 結びは第7章「まとめと今後の課題」であり、全体を総括したのち本稿の意義や今後の課題を述べている。

<審査の概要>

ウズベク語の呼称に関するさまざまなトピック、なかでも親族名称の細かな使い分けに関して、アンケート調査に基づきこれまでよく知られていない貴重なデータを提示しているという点で、本論文はまず高い資料的な価値を有している。またこれに先立つ章での2人称代名詞の用法についての考察も、実例に裏付けられた説得力のある議論として評価できる。特に代名詞 *siz* が本来の複数用法から敬称としての用法への移行をほぼ完了しており、結果として同系統のカザフ語やキルギス語と類似した体系になっているという重要な指摘は、本論文の独創的な成果のひとつである。さらに愛称の形成法に関しても、多数の実例の収集をふまえた著者の分析は、今後この分野の研究にとって有益な資料となることが期待される。

その一方で、審査委員からは議論の進め方に関していくつかの疑問点も指摘された。会話例を用いているとはいえ「書かれた」ウズベク語データに基づく第4章と、厳密には特定の地点における方言データとみなすべきアンケート調査に基づく第5章の分析との、資料の面での整合性が十分に考慮されていない点、またアンケート調査の結果を利用するにあたって、十分な数ではない使用例から結論を導いたり、母語話者としての著者の知見を不用意に差し挟んでいる箇所が見られることなどが指摘された。第6章で資料として用いたウズベク人の人名リストの信頼性にも若干の疑義が示された。さらに日本語との対照という面では、実例調査もアンケート調査の方法もいまだ不十分であると言わざるを得ない。とはいえ、先行研究が乏しい研究テーマに対していわば手探りでここまでの成果に至ったことは、著者の長年のたゆまぬ努力の結果に他ならず、その努力に対しては高い敬意が払われるべきであると考えられる。特に著者は、ウズベク語の呼称をいかに分析すべきかを模索する中で、待遇表現研究の豊かな蓄積に代表される日本語学のさまざまな成果を

丁寧に参照し、それらを本研究に適切に応用している。その意味で、本研究は日本でこそ執筆可能なものであったといえるだろう。1月28日に行われた公開審査における、審査委員の質問に対する受け答えからも、著者が自らの研究テーマに対しこれまで誠実に取り組んできたことや、残された問題点や今後改善すべき点をしっかり認識していることが確認できた。以上、提出論文と最終試験の結果により、審査委員会は全員一致で HALNAZAROV MAAMORJON 氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると判断した。